



全生

題字

国泰寺派管長 澤大道老大師

平成二十七年 正月

編集・発行

全生庵
平成27年1月
第22号

〒一〇一〇〇〇一

東京都台東区谷中五丁目四番七号

電話 (三三二二) 四七一五

FAX (三三二二) 三七二五

編集人 巖 洋 俊

印刷所 三宏印刷株式会社

新年明けましておめでとうございます

旧年中は格別のご法愛を賜り御礼申し上げます

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

日本人にとって「花」というとまず桜ですが、禅の世界においては桜よりも梅の方がなじみ深い花です。

昨年上梓させていただきました「花のように生きる」にも記しましたが、その理由は三つあります。第一は百花にさきがけ、この厳寒の時期に花をつけること。第二に強烈ではないが、ほのかなやさしい香りがあること。そして第三は実を結ぶことです。

花は寒さにも風雪にも文句を言わず、逃げることもありません。ただそこで精一杯花を咲かせます。

人も生きていればいろいろなことがあります。決して楽しいときや順境のときばかりではありません。苦しいときや悲しいとき、逆境のときも必ずあります。しかし、その苦しい悲しい逆境のとき、どう自分を律し、どんな行動をしていくかが大事なことです。自らを奮い立たせ、真正面から事に対していく勇氣を持ちたいものです。内に勇氣を持つ人こそが、本当にまわりにやさしくできる人です。そして、結果がどうあれ自らが信念をもってやったことは必ず実になっているのです。

新年にあたり、新しい気持ちで、梅の花に負けないように生きたいものです。

全生庵住職 平井正修

春彼岸法話

鎌倉円覚寺派管長 横田南嶺 老師

前号の続き……

次に「仏法僧縁」とあります。この仏法僧というのは、普通は三宝と申しておりますけれども、三つの宝、三つの拠り所です。第一はやはり「仏」。仏様が拠り所です。二つ目の「法」というのは仏様の教えという事で、仏様の教えが拠り所。そして三つ目の「僧」というのも我々の拠り所なのですが、ここはいつも話が難しく、この頃のお坊さんはあまり拠り所にならないとよく言われるのですが、この「僧」という言葉は元々集まりという意味です。ですから本来はお坊さんだけではないのです。お坊さんもそうですし、それから皆様のように仏教の教えを学ぼうという信者さん達もそうです。教えを学ぼうという集まりで、これが拠り所となります。仏様が拠り所であり、教えを学ぶことが拠り所であり、一緒に学ぶこの仲間が拠り所となるのです。

そしてそのことにより、「常楽我淨」という四つの言葉が出てきます。これが、仏教の色々な教えがこめられた言葉なのです。まず「常」ですが、本当は「常」ではなく「無常」です。「常」というのは、つねに、永遠である、という事です。しかし実際はそうではあ

りません。無常です。本当に明日どうなるか分からない。あの東日本大震災の時は、まさしくその通りですね。よくテレビで予言する人がいますが、三月十日に明日は危ないぞ、と予言してくればどれだけ良かったかと思えます。我々がいくら坐禅をして修行をして、一寸先のことですらわかりません。「常」ではないのです。「無常」なのです。そして、

次が「楽」とありますが、世の中を生きる事は決して楽なことばかりではありません。お釈迦様は、生きることは苦しみであるとおっしゃいました。苦しみというのは自分の思うようにはいかない苦しみです。その次は「我」とあります。しかし本当は「無我」です。自分一人では生きられないですし、自分で全部自分のことをやればそれは一番いいでしょうけれども、自分一人では生きることなんていうのは本当に限られています。みながやはりお互い手を取りあい助け合っていくことがなければ生きていきません。それから「淨」、すなわち清らかとありますけれども、世の中、清らかばかりではありません。震災後、五月十一日に私は初めて福島県にお見舞いに参りました。一番の衝撃はやっぱり匂いでしたね。

テレビで津波の情景は多く見えますけれども、匂いはテレビでは出ませんので、あの凄まじい匂いと情景は忘れられません。

このように、お互いが生きる世の中は、無常であり明日どうなるかわからない。そして

楽しいことばかりではなく苦しみである。自分一人では何もできず決して清らかなものではない。その中で私たちはどう生きていったらいいのか。ここに震災の被災者の方がうたった詩があります、「水求め五時間並ぶ雪の空見知らぬ同士で傘さしかけつつ」と。非常に素晴らしいと思います。

日本人の心、あるいは観音様の心、仏様の心をよく表していると思います。自分も大変な目に遭っていて、お互いそのような状況の中にいてもお互いに傘をさしかけて思いやりというところですね。この心は観音様の心です。お互いが観音様の心を持っているから、そんなわずかな水を頂くのに五時間も立ってならば、そこに雪も降ってくるけれども隣の人を思いやって声をかける。

そのようにしてお互いがいたわりあう、自分も大変な目にあっていても相手のことを思いやる心、これが観音様の心でありお互いの本心です。そのお互いの本心、観音様の心をもって生きることが無常の中で常に変わることはないものです。そしてお互いを思いやり合いながら生きていこうということが、この苦しみの多い中であって本当の楽しみです。楽しみという、我々は自分の楽しみを考えます。自分一人の楽しみは必ず飽きてしまいます。でも本当の楽しみというものは、先程の詩のように、困っている人に傘をさしかけてあげて相手の人に喜んでもら

う喜びと楽しさです。この喜びや楽しみは飽きることはありません。お互いが手を差し伸べあいながら生きていく、それが真実です。そしてこのように生きて行くことこそ清らかな生き方であり、「常楽我浄」という四つの言葉に込められた観音様の心です。これが常に変わることはない本当の楽しみであり誠の己であり清らかな生き方なのです。

続いて「朝念観世音 暮念観世音」とあります。我々は普段の生活の中ですれれば本心である観音様の心を見失いがちですから、朝は観音様に手を合わせて一日が終わったら夕べにまた観音様に手を合わせて自分自身の本心をもう一度見つめなおす必要があります。

そして最後に「念念従心起 念念不離心」とあります。「念念従心起」の「念念」というのは、一念一念、念じて、思い、願うことであり、今の言葉で言えば祈ることだと思えます。「従心起」というのは、心より起こると読むのですが、この「心」というのは観音様の心であり、私は真心だと言いたいです。真心から起こし祈るのだと。

震災が起きた当時、若い人たちは瓦礫の撤去や炊き出しにほとんど行きました。それも大事なことだと思いますが、私はそう何度も本山を留守にできません。何かできることはないかと思つて、ずっと続けていたのが延命十句観音経の写経でした。下手な観音様の絵を書いてその上に延命十句観音経を書きまし

て、それをボランティアに行く人たちにたくさん渡して、先方のお寺に行ったら、まずこれを渡してほしいとお願ひしました。また避難所に行き、誰か身内を亡くした人がいれば、これを渡してほしいとも言いました。ずいぶん書きましたが、そしたらある晩に、宮城県のお仙沼のお寺から私のところに電話を頂きました。そこのお寺は本来避難所だったので、避難所のお寺まで津波がきて本堂の鴨居まで全部流されてしまったといいます。前の年に本堂をはじめ全部新しく建て替えたのですが、わずか一年少して津波により流されてしまい、お檀家さんは百五十人亡くなりました。このどうしようもない時に、この延命十句観音経にふれてこれを読もうと思ひ、みんなでお経を読んで祈るしかないと思つたそうなのです。

それで私も必ずお参りに行きますからと言つて電話で約束をしました。その後、気仙沼のお寺までどうにか行つてお参りしてきました。本堂はまだ足の踏み場もありません。周りの壁は全部流されましたから、柱と屋根だけが残っています。こちらから観音様の御本尊をひとつ寄進しようと思つて行きました。本堂に百五十人のご遺骨と位牌がズラつと並んでいました。和尚様がひとつひとつ説明してくれました。これは総代の人で、この本堂を建てる為に一所懸命やつてくれたけれども流された。ここのお母さんは旦那と息子

延命十句観音和讃

大慈大悲の 観世音

生きとし生ける ものみな
 苦しみ悩み ことごとく
 すくいたまへと いのるなり
 苦しみのぞき もろともに
 しあわせいのる ころこそ
 われらまことの ころにて
 いのちあるもの みなすべて
 うまれながらに そなえたり
 ほとけの慈悲の 中において
 むさばりいかり おろかにも
 ほとけのころ 見失い
 さまようことぞ あわれなる
 われら今ここ みほとけの
 みおしえにあう さいわいぞ
 おしえを学ぶ 仲間こそ
 この世を生きる たからなり
 われを忘れて ひとのため
 まごころこめて つくすこそ
 つねに変わらぬ たのしみぞ
 まことのおのれに 目覚めては
 清きいのちを 生きるなり
 朝に夕べに 観音の
 みこころいつも 念ずなり
 一念一念 なにしても
 まごころよりは おこすなり
 一念一念 観音の
 慈悲のころを 離れざり

と一緒に避難しながら目の前でその旦那と息子が流された。こちらは話を聞きながらも涙が流れるだけです。お参りに行ったのですがどうとお経がでませんでした。お悔みに行ってお経を読む事は何度もやっています。慣れているつもりでしたが、お経も読めずただ涙を流して和尚さんの手を握って帰って参りました。それでも向こうの和尚さんは大変感謝してくれました。そこで学んだのです。

いくら坐禅をして修行をしたからと言ってそれほど立派になるものではない。やはり一緒に涙を流して共に手をとって共に祈るということだと、それでいいのだと学びました。

この本の一番終りに「延命十句観音経意識」があります。延命十句観音経の心をこの意識にまとめてみました。この本を全部読むのが大変な人は意識だけ読んでください。これで十分わかるようになっていきます。ただ意識だけではすと、これは唱えにくいと思ひまして、昨年、「延命十句観音和讃」というものをつくりました。それは、本が一番最初の、「延命十句観音経」の次にあります。これは、ほんの五分か十分程でできたのです。観音様から頂いた和讃だと思っています。本来、私達の本心はみんな観音様の心を持っています。しかし、普段それを見失ってしまっています。だからお互いに手を取り合って仏様の前で手を合わせて祈るのです。この祈ることによつ

て私たちの本心が目覚めてくるのだと学びました。

最後にもう一つ、陸前高田に行った時の話です。陸前高田も大変な被害でしたが、お墓だけは綺麗になっていました。私は恐れ入ってお寺の和尚にどうしてお墓だけ直したのか聞きました。すると、地元の漁師さん達が、自分達は皆避難所や仮設住宅でよいが、ご先祖様に気の毒な思ひはさせられない、といつて皆まずお墓を綺麗に直したそうなのです。私はそれを聞いた時に、人の真心というのでしようか、本心の素晴らしさを感じました。こういう心をうたったのがこの延命十句観音和讃でございます。最後に皆様と唱和して終わります。ありがとうございます。

坂東三十三観音霊場巡礼紀行

小林茂生

去る十月十七日より二日間の日程で、第五回坂東三十三観音霊場巡礼の旅が開催された。今回は坂東巡礼最後の旅であり、千葉県下七ヶ所の寺院を巡った。秋の穏やかな陽気の中、一行を乗せたバスは、まずは銚子にある第二十七番札所・円福寺を目指して東京を出発した。道中の風景は、紅葉にはまだ早いものの風に揺れるススキが美しく、我ら一行を温かく歓迎しているかのようであった。

無事、円福寺の参拝を終えて、二ヶ寺目の、

第三十一番札所・笠森寺（通称「笠森観音」）へと到着した。寺伝によると、七八四年に伝教大師・最澄上人が、楠の霊木で十一面観音菩薩を刻み山上に安置して開かれたといわれる。笠森寺へ到着し、参道を前にして見上げる自然林は、国指定天然記念物笠森寺自然林となっており、ここからではまだ本堂や建物などは全く見えない。早速、木立と苔に囲まれた参道を進むと、石階段を登るほどに空気は澄み渡る。参道の途中には、一つの根からそびえ立つ三本杉の名木や、松尾芭蕉の句碑、楠の霊木「子授楠」が現れる。暫く歩くと漸く二天門が見えてきた。門には風神像、雷神像が睨みをきかせており、ここを通過すると、大岩とその岩の上に鎮座する国宝の観音堂が目に飛び込んできた。圧倒されるような荘厳な景色に思わず一同感嘆の声をあげた。この



《第三十一番札所・笠森寺》

観音堂は、日本で唯一という特異な建築様式で建てられている。六十一本の柱で支えられた四方懸造（しほうかけづくり）と呼ばれる様式で、京都清水寺の舞台と似ているが、四方支えるものが柱だけという驚きの構造を持つ。観音堂へ行くには勾配のある七十五段の階段を登るが、上の回廊からは房総の素晴らしい景観を眼下に一望できる。美しい景色を堪能し次なる巡礼地を目指す。

初日巡礼の最後となる、第三十二番札所・清水寺に到着した。境内には赤穂四十七士の木像や、百体観音堂があり、四国・坂東・秩父札所の合計百か所の二本尊を祀る。付近一帯は、県指定の環境保全地域「清水観音の森」と呼ばれる閑静な場所であり、心洗われる時間を過ごした。夕刻、本日の宿、勝浦の「ホテル三日月」に旅装を解き、旅の疲れを癒して、一日目の巡礼を終えた。

翌十八日は、朝から快晴に恵まれ海上から浮かぶ朝日を背に巡礼へと出発した。四ヶ寺目は房総半島の南端、館山からすこし離れた那古山の中腹に位置する第三十三番札所・那古寺である。この那古寺の山号「補陀洛（ふだらく）」とは、



《第三十番札所・高蔵寺》

梵語の「ポータラカ」に由来し、観音菩薩の住むインド南端の岬を俯瞰する山のことを指すという。つまり「補陀洛」とは、観音信仰の中心地であり「眺望も絶景で海に臨んで花咲き、鳥がさえずる極楽の境地」を指している。那古寺も、多種の草花や県指定大蘇鉄の木があり、眼下に見える館山湾は、鏡ヶ浦と呼ばれるほど波が穏やかでも心地がよい風景であり、まさに「補陀洛」の名にふさわしい。

五ヶ寺目は、第三十番札所・高蔵寺（高倉観音）である。本堂は市指定文化財になっている。この本堂は高床式の構造になっており床柱が八十八本あり、床の高さは二、五m程ある。本尊として樟木の一本彫で全長三、六mの秘仏・正観世音菩薩が安置されている。

続いて六ヶ寺目となる第二十九番札所・千葉寺に向かう。山門をくくると県指定天然記念物の大銀杏の大樹が威風堂々と聳え立つ。記録によれば、樹齢千三百年で、七〇九年に僧・行基がもたらしたも

のと伝えられる。

最後の七ヶ寺目は第二十八番札所・龍正院で、これでいよいよ結願となる。国指定重要文化財の仁王門が迎えてくれた。この仁王門には大きなしめ縄が飾られており、縄は龍を表し、その下に装飾されている鳥は山を表しているそうで、全体としては山の中を行く龍を示しているという。このしめ縄には次のような由来がある。江戸時代に門前で火災があった際、本堂の屋根から大きな扇で炎を扇ぎ返したところ、本堂から下の集落は焼失をまぬがれたという。それ以来、火伏せの仁王尊として篤く信仰され、下の集落の人々によって龍をかたどった大きなしめ縄が毎年奉納されているのだという。本堂は朱塗りで、彫刻や天井絵図が施され和様かつ荘厳な造りである。その中で最後の奉納読経を行った。

今回で「坂東三十三観音霊場巡礼」は無事に結願となった。五回計十日間の巡礼の旅であった。帰路の車中では住職より「満願となると、最後に善光寺・北向観音・元善光寺へ御礼参りをするのが慣わしとなっている」というお話があった。

私個人としては今回が初めての参加であり満願を迎えるにはまだまだ程遠い状態ではあるが、他の皆様は「相模・上野・武蔵・下野・常陸・下総・上総・安房」と巡り、無事に満願を迎え、そのお顔には観音様のような優しい笑顔が湛えられているように感じられた。



●住職の著書が出版

九月二十日 第三弾となる住職の著書「花のように生きる」が幻冬舎より刊行されました。

花のように無心に生きるための指南書です。心を取りセットし、いまの豊かさを知る85のヒントを住職が分かり易く説いております。是非一読下さい。

行事報告

★大施餓鬼会

七月八日 お盆の大施餓鬼会を厳修いたしました。当日は猛暑にもかかわらず、多くの檀信徒の皆様にお参りいただきました。

★鐵舟忌

七月十九日 当庵開基山岡鐵舟居士毎歳忌法要を厳修いたしました。法要後は、フリー編集者の加藤淳氏が「鐵舟居士と清川八郎の手紙」と題し講演を致しました。

★圓朝忌

八月十一日 落語協会主催の三遊亭圓朝居士毎歳忌を厳修いたしました。法要後には三遊亭圓窓師匠による奉納落語が仏前に奉納されました。

★圓朝座

八月十一日夕刻 鈴々舎馬桜師匠による落語会が行われました。毎年圓朝居士のご命日に圓朝作品を口演している会で、鈴々舎馬桜師匠が「怪談牡丹燈籠」、三遊亭圓丈師匠が「新・累物語」を口演されました。

★圓朝寄席

八月十六日 今年で三十回目となる町会主催の圓朝寄席が行われました。出演は三遊亭王楽師匠、三遊亭鳳楽師匠、三遊亭圓橋師匠でした。

★泉鏡花の世界

八月二十五日 小説家泉鏡花の短編集を朗読する「鏡花と音」が行われました。朗読に併せ後ろから効果音を流し、朗読に立体感を表現した、趣向を凝らした会でした。

★新しいジャンル「怪談師」

八月二十九日 女流怪談師牛抱せん夏さんによる「怪談会」が行われました。怪談話専門の「怪談師」と言われる女性演者が「怪談牡丹燈籠」を現代風にアレンジして口演されました。

★竹本住之助百二十年忌

九月七日 女流義太夫竹本越孝さんによる奉納浄瑠璃会が行われました。これは明治期に活躍した娘義太夫竹本住之助の墓地在当庵にあることが縁となって行われました。

★秋彼岸法要

九月二十日 お彼岸入りの日に秋彼岸檀信徒総供養の法要を厳修いたしました。法要前には住職の法話がございました。

★全生亭

十一月三日 第十一回全生亭が行われました。今回は五街道雲助師匠が圓朝作「政談月の鏡」、金原亭馬生師匠が圓朝作「塩原多助一代記」その参りを口演されました。

★臘八坐禅会

お釈迦様が十二月一日から十二月八日まで坐禅を続け、八日の朝に明けの明星をご覧になってお悟りをひらかれた因縁によって十二月一日朝々八日朝まで朝晩坐禅会を行い、八日朝には坐禅後、成道会を厳修いたしました。

全生庵ホームページ

<http://www.theway.jp/zen/index.htm>

メールアドレス

zenshoan@cup.ocn.ne.jp